

～追悼メッセージ～

追悼式で朗読された小山美里さんのメッセージをここでご紹介します。



志津川高校3年
小山美里さん

あの日、私は戸倉小学校の5年生でした。裏山へ避難する時、先生たちが「上へ上がれ！」と叫ぶ声、目の前に壁のように津波が押し寄せて来た瞬間、五十鈴神社の境内で友だちと肩を寄せ合った夜……。今でもくつきりと記憶に刻まれています。

家に帰りたい、子どもだった私は家族を思って泣きました。「じいちゃん、ばあちゃんはどうしているだろう」。両親は共働きでしたから、私はいつも祖父母と一緒だったのです。津波に囲まれた闇の中、たき火の炎は温かく、保育所からずっと一緒だった友だちや、先生たちが一緒にいるということが私を安心させてくれました。

両親や2人の兄、祖母は助かりましたが、祖父の安否は分かりませんでした。それでも祖父が亡くなったなんて、想像できませんでした。「きつとじいちゃんなら、山に避難して生きてる。そのうちひよっこり、

にこにこして戻ってくっから」と皆で話していたものです。

地震が来たとき、在郷の家にいた祖母は近所の人たちと高台に避難しました。祖父はお寺の奥の方にある田んぼに、自転車を出かけていました。いつもばあちゃんと一緒に田植えをしたり、稲刈りをしたりしていた大切な田んぼです。そこから山の方に逃げていけば助かったはずですが、

でも、そのささやかな希望は無残にも消えました。4月になって、祖父の遺体がお寺の近くで見つかったのです。祖母がちゃんと家から避難したか、自転車を飛ばして確かめに行ったために、津波に巻き込まれたのだらうと祖母は言っていました。祖母は肩を落として、つぶやきました。「ひとりぼっちだ。」。その寂しそうな姿が私の胸を締め付けました。

祖父母は夫婦で苦勞しながらコツコツとお金をため、家を建て、田畑の土地を手に入れ、2人で作物を育ててきました。2人とも働き者で、80を過ぎててもじっとしていることなんてありませんでした。

祖父はお盆や正月の行事を大切にしていました。お盆に玄関先でわらを燃やし、ご先祖様を迎えた夏の宵、闇を照らす優しい炎といつも穏やかだった祖父の笑顔を思い出すと、心が

ほんわりと温かくなります。

私には、一つだけ心残りがあるので。震災の2日くらい前の夜でした。どうして祖父はあの日突然、そんなことを言い出したのでしょうか？祖父は私に「今晚、一緒に寝るか？」と言ったのです。5年生の私は照れて「いやだ」と断ってしまいました。あの時、どうして「うん！」って言ってあげなかったんだろう？末っ子で女の子の私を、目に入れても痛くないくらい、かわいがってくれたじいちゃんでした。祖父とともに過ごしたいろいろな思い出、牛乳をかけたご飯をおいしそうに食べる姿、私にかけてくれた優しい言葉……。ふと祖父のことを思い出す度に、「どうしてあの時？」と後悔の気持ちが増えるのです。

私はこの7年の間に、被災しなればばい出ることがなかった多くの方々と出会いました。避難所で細菌性胃腸炎に感染して米谷病院に入院した時、親身になってくれた看護師の皆さん、戸倉小学校で学習支援をしてくれたワールドビジョンジャパンの皆さん、志津川高校に開校した学習支援センターの志翔学舎の皆さん、その他にもたくさんの方々とお会いすることができました。また、同じ古里で同じ体験をした友だちと、地域の鹿子躍や波伝谷春祈禱の獅子舞にも

参加し、自分の古里に生きる人たちが、互いに支え合う姿も見つめて来ました。

人は絶望や孤独の淵に立っている誰かの心の支えになり、勇気づけることができるんだと、私はその出会いから学んだのです。

仲のいい友だちがストレスで体調不良に苦しんだり、祖母が祖父を失った悲しみになれる姿を、私は目の当たりにしました。いつかそんな苦しみの中にある人たちの、心を支える仕事をしたい。私の中に、未来の自分の姿が浮かび上がって来たのです。私は臨床心理士になることを目指して、この春から、仙台の大学に通います。

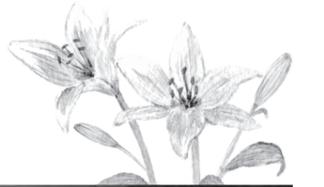
どんなときもにこにこ人様のことを思いやる優しい祖父の孫であることを誇りに、そして両親の励ましに報いることができるように、目標に向かって頑張りたいと思います。

じいちゃん、見ていてね。

傷ついた人たちの心を、救うことができるような大人になるよ。

じいちゃんのように、人を思いやれる人間になるよ。

東日本大震災
南三陸町追悼式



東日本大震災から7年を迎えた3月11日。
震災により犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、復興への誓いを新たにするため、東日本大震災南三陸町追悼式を執り行い、ご遺族など約1,100人が参列されました。
7年という月日が流れても決して癒えることのない悲しみ。
この日は、鎮魂の深い祈りに包まれました。

